

『台湾における物質文化研究の現状と課題』

Part 1 15:00~16:20

「台湾における原住民の物質文化研究についてー1895年以降現在までー」

王嵩山氏 逢甲大学公共政策研究センター 教授

台北芸術大学 文化資源学院 / 博物館と文化資源研究センター 研究員

【要旨】台湾における民族誌調査と民俗調査といった二つの学術活動の始まりは、日本統治時代の総督府による臨時台湾旧慣調査会まで遡ることができる。民族誌調査は、原住民の多様な文化を視野に入れ、モノ（生活道具）への関心は、それぞれの文化の特殊性の把握を目的とした。民俗調査は、漢民族の日常生活のあり方を対象にし、モノへの関心は、生活のなかで如何に使われているかを見つめた。これに対して、国分直一がちょうど民俗研究における地域差の認識の重要性を指摘し、大きな影響を与えた。戦後、歴史的個別主義（Historical Particularism）の影響を受けた人類学者は、工芸の分野においてより多くの民族誌調査の成果を上げた。1980年代以降は、長い時間をかけ、より踏み込んだフィールドワークを通じ、台湾の人類学者は物質性（materiality）について検討し、モノのソーシャル・エージェンシー（social agency）を解釈した。モノと時間、空間、性別、身体、知識、信仰、文化的アイデンティティ、技術（手法と手順）、および新しく作ったモノなどの関係といった論点を提起して研究も進められてきた。また、西洋における南島語族（オーストロネシア語族）研究との対話も試みられている。

Part 2 6:20~17:00

「台湾における民俗系博物館の現状と問題」

黄貞燕氏 台北芸術大学博物館研究所 助教授

台北芸術大学 文化資源学院 / 博物館と文化資源研究センター ディレクター

【要旨】博物館の歴史を振り返ってみると、民俗系博物館の発展は、少なくとも以下の四つの要素の影響を大きく受けていることが分かる。まず、民俗（あるいは常民文化）をいかにナショナル・アイデンティティに関わる政策にするかの課題、第二に、地方やコミュニティ意識の高まりと文化の民主化の動きに伴う地元文化への関心、第三に、地方やコミュニティづくりがもたらした地元文化の資源化の流れ、そして最後に、民家や生活、仕事の道具までにわたる民俗資料と収集・保存、研究、展示などの概念と技術の成熟度である。本稿は上述した視点から、台湾における民俗系博物館の発展と現状、課題をまとめる。

Part 3 17:00~17:30

質疑応答